

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十七年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二卷第八号（通巻第一四〇号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第140号

12. 2005

猫じやらし

品川 鈴子

猫じやらしここに移民の船出の碑

東^{そくたい}帯の色にも位階草の花

せつかちの歩を留めたる草の花

登り窯紅葉隠れに青磁焼く



菊展に三漢みたりしやがみて千本立

しぐれ巖海鵜はなべて韓へ向く

ベーリング海に鯖雲漂へり

機灯にも親しむテレビゲームして

露草の寝墓に連れを見失ふ

破れ芭蕉大西洋へ翔かんとす



玉 鈴

愛媛 三浦如水

大辞典夜寒の膝に乗せて見る
どてかばちやニスで光らす品評会
鬱の杖ひと振り倒す曼珠沙華
ガメランの一打蛇踊じゃおどりくねりだす

愛媛 三浦 澄江

余生なほときめきもあり篝火草
気兼ねする人なき余生アツパッパ
ばつちりと今朝の服装白木むくげ櫃
研げば鳴る米の手ざわり爽やかに

兵庫 三枝邦光

庭さきに旧ぶ荒神カンナの緋
地藏会の裏路地明り漁り町
星きららペンション村の地藏盆
波止を指す単線鉄路月の照り
高張を灯して城下三日みかの月

吟

兵庫 水野範子

颯風の真夜に聞こゆる槌の音
超颯風 仏足石を穿つ雨
桐箱より這ひ出る宝兜虫
薪能亡霊に舞ふ火蛾数多
満月の水舞台にて「ムーンリバー」

香川 三橋 早苗

吾亦紅祖母の紬を縫ひ直す
届きしをすぐに炊き上げ今年米
手術日の留守番役に秋の声
秋の蚊に刺されるままの薄茶席

和歌山 宮原利代

鮎釣りの激雨臆せず竿握る
月天心庭に一脚椅子残し
新刊の書を開くなり夜の秋
野良犬の尻尾きりりと雲の峰

茨城 三輪 慶子

新涼やプラットホームの端の端
新涼や和服の歩巾保ちゐる
虫籠を捧げしままに靴をはき
秋扇能楽堂の狭き椅子
帯解けばこぼれ落ちたる秋扇

愛媛 村上 和子

蝦蟇三里歩いた息使い
夏負けを隠す女の肩パット
娘にも些少の遠慮生身魂
秋出水攫ひ忘れし甕一つ
亡き父母の手も借りたくて豊の秋

大阪 師岡 洋子

手囀ひに吹いて育てて芋殻の火
ひき潮に引かれてゆきし瓜の馬
夕顔の木戸くぐり来る喪の使ひ
鳳仙花病後の爪の伸びやすし
八朔の炎のまはる中華鍋

兵庫 八木柀一郎

新涼のわが身に添ふや竹箒
黒牛の繋がれてあり晩夏の木
かげろふや水底すでに暮れぬたり
病窓に吹かざる蜘蛛の重きかな
ふりむけば己が足音露の空

東京 安田とし子

星飛んで空あたらしく残りけり
永らへて嘘のいくたび榎榎の実
ぐい飲みは九谷が宜し新走り
寧き死を願ふ齡や秋桜
瑠璃色を負ひし蜥蜴の穴に入る

香川 合川月林子

朝市の鴉の高音に始まりぬ
まだピクと動く手脚や鴉の贅
いつのまにかくも老いたり敬老日
ちよんちよんと水を叩きて鬼やんま
鶏頭の首垂れやすく折れやすし

薬草歳時記

(一三九)アオキ(青木)

市橋章子

雪降りし日も幾度よ青木の実

中村 汀女

アオキはミズキ科の高さ2〜3mほどの常緑低木。関東以西の日の差し込む山林中に自生しています。寒さ、外気汚染、日陰、湿地などに強く、環境条件のあまりよくない都会の公園、庭園などにも植えられ、園芸品種も多く、雌雄異株です。近似種の花アオキは北海道や日本海側の多雪地帯に自生してブナ林の低木層を形成し、ナンゴクアオキは沖縄、九州地方に分布しています。

四月ごろ、海老茶色の地味な小花が円錐状に咲き、花の房の大きいものが雄株、小さいものが雌株。冬、小指の先ほどの実が艶やかな赤色になり、光沢のある緑の葉とともに、木々の葉が落ちた庭に、急に人目を引くようになりま

す。
近年は外国でも観葉植物として人気があります。元禄三(一六九〇)年、来日したドイツ人ケンペルが、葉はもと

より枝も青々とした常緑樹が、冬の深まりと共に真っ赤になる実を結ぶのに感動し、帰国後の著書に紹介。その後イギリス人グレットアールが持ち帰ったが、雌木だけだったので実を結ばず、万延元(一八六〇)年イギリスのロバート・フォーチュンが雄株を持ち帰り、ケンペルより百七十余年後、赤い実を結びました。

枝葉が青々としているので「アオキ」と名付けられたが、アオキバ、ダルマノキ、イボジダマ、ミソツバ、ミソブタ、マクラッコ等、地方名もいろいろで面白い。

生葉にはオークビン(配糖体)やクロロフィル(葉緑素)などが含まれており、これらには排膿・消炎・抗菌作用があります。

おでき、腫れもの、軽いやけどなどに、生葉を火であぶり、とろとろになったものを患部に貼り、軽く包帯で押さえておきます。しもやけには、葉を水で煎じたエキスを塗るとよい。青木の花は春季、青木の実は冬季。

参考文献「牧野薬用植物大図鑑」

北隆社

「身近な薬効植物一〇〇」

実業之日本社

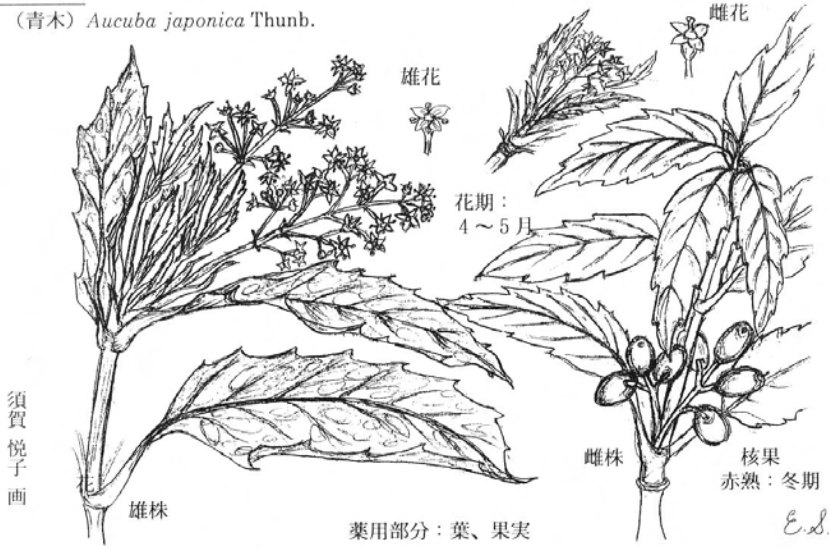
「図説花と樹の大事典」

柏書房

著者略歴

神戸薬科大学卒

アオキ (アオキバ) [アオキ属] (みずき科)
 (青木) *Aucuba japonica* Thunb.



薬用部分: 葉、果実

庭隅に文鳥の墓青木の实	弾まず来る縁談一つ花青木	青木の实こぼれて土に還るのみ	青木の实つつき散らして尾長住む	降りはじめ雪に雪付く青木の实	夕凍 <small>ゆふひよ</small> のにはかに迫る青木の实	闇隔て焚口の燠青木の实	長病のすぐれぬ日あり青木の实	青木の实紅をたがへず月日経る	掃きつめし雪なだらかや青木の实
塩出	宮脇	瀧	細見	川崎	飯田	香西	富安	柴田	佐久間
眞一	白夜	春一	綾子	展宏	龍太	照雄	風生	白葉女	法師

ぐらつげ

鈴の奏

品川鈴子選

夜濯にコロン数滴落しみる 東京 松本 アイ

盆提灯明りに浮ぶ新木履 さらぼつくり

派手となりし小千谷縮の浴衣手に

明易しラジオの局をまわし聞く

梨むきて刃先に刺して貰ひけり 埼玉 向江 醇子

そば降れる雨で潰えし運動会

大型の掃除機の慾し野分あと

かなかなと夕ゆづともにもにす一人居て 兵庫 明石 文子

時差呆けも跳び起きる程雷激し

菜園のまつただ中に百日紅

鯛雲齒の二十本残し逝く

秋彼岸抑留の日々ありしとは 兵庫 廣中 浩子

夏帽子じぐざぐ進み山に入る 神奈川 八木 紀子

富士登山足の重たき夫婦づれ

遠雷におどされ下る九合目

富士八合め霧かくす昔小屋

食卓の桃に大小指のあと 兵庫 村田とくみ

バーベルのうつすら白く葉月尽

煙管もつ女形白塗り穴まどひ

行水の児ら尻まるし水を足す

観月会皆写真家に变身す 神奈川 山本久美子

満月や琴の音ひびく三溪園

父の声母に届かず秋迎ふ

訃報入り半襟変へる夜の秋 兵庫 藤井久仁子

西瓜割り笑ひをさそふ棒の先

蕎麦の花雲むらさきにたなひけり

褪せるもの色付くものや秋の径

秋涼しはじめて銀の耳飾り 兵庫 廣中 浩子

運河より見上ぐ中世夏帽子

ベルリンの残りし壁に残暑かな

秋近しロンドンアイにて一望す

フライトの窓に三日月旅おわり 大阪 今谷 脩

鬼やんま飛ぶ風水にまなこ据え

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句く十五句 史 あかり "

*選句は全て 品川鈴子

盆提灯明りに浮ぶ新木履さしほくろ

松本 アイ

きりと明晰な講義をしました。私は半月ほど尾を引きます。

盆の灯籠が点るとぼんやりお供えものを照らし、ふと目

富士登山足の重たき夫婦づれ

八木 紀子

に留まった真新のぼつくり。女兒用の割り下駄は、祭りや七五三のおしゃれ履き。高い前のめりの形で漆塗に蘭表。ぼこぼこ歩けば裏側に嵌めた鈴が鳴る。その晴姿を親も子どもどれ程楽しみにしたとか。木履に籠もる哀惜。

梨むきて刃先に刺して貰ひけり

向江 醇子

瑞々しい梨を手も汚さず剥いて貰う幸せ、談笑しながら剥き、まず一切れを作者にくれる。濡れた刃先に突き刺してお味見をと、信頼しきった仲の受け渡し。温かい間柄には刃物など気にもせず、気楽な親しみのもてなし。

時差呆けも跳び起きる程雷激し

明石 文字

時差の影響には個人差が大きく、平気な人と過敏な体質があるようです。この句は後者か、睡魔の虜も凄い雷には滑稽な目覚め。因みに誓子は晩年でも大旅行の翌日もしかっ

気が進まない所へ行くのは自然に足取りが重くなるものだ。けれどこの足の重さはそれではない。永年の念願だった富士山頂上を目指し、気持は弾んで意気込みも十分ある。だがその気持とは裏腹に、体はついていけない、足が重いのである。定年退職後のご主人と一緒に仲良く、ゆつくりとマイペースで富士登頂を目指して歩いておられる姿が目

食卓の桃に大小指のあと

村田とくみ

桃の柔らかかそうな手触り、うす桃色の肌、誰もが触ってみたい、押してみたい誘惑にかられるのだろう。店の桃には触れないが、食卓の桃ならちよっと位いいだろう。小さい指あとはいたずらツツ子のあの子のもに決まっているが、大きい方は誰の指？

観月会皆写真家に変身す

山本久美子

由緒ある名園で観月会が催されたのだらう。しつらえの舞台ではきつと琴や笛の演奏が雰囲気を盛り上げている。申し分のない満月である。言葉に尽くせない感動が胸にせまる。この一瞬を芸術的な写真に残せたら…と、あちこちで一斉にシャッターを切る音が。月は魔術師、皆を写真家に変身させてしまう。

西瓜割り笑ひをさそふ棒の先

藤井久仁子

藤井さんは桔梗句会のメンバーで、この句は先生の後選で特選を得られた句である。「笑ひをさそふ」の中七に対して「棒の先」と一点に焦点を絞られたところが、この句の面白さであろう。目隠しをされながら棒の先で狙いを定め、えいと打ち下ろしたところが見当はずれの場所だったりして…。

ベルリンの残りし壁に残暑かな

廣中 浩子

ベルリンの壁は、東西ベルリンの境界上43kmにもわたるものであった。東から西への逃亡を防ぐためのもので東側が作ったものだが、90年東西ドイツ統一を機に開放された。もうすっかり取り払われて、その跡地に植樹がはじまって

いると聞いていたが、まだ残っている壁もあるようだ。多分メモリアルとして残しているものと思うが、そこにことさらの残暑を感じられた作者。戦争の記憶をまざまざと。

鬼やんま飛ぶ風水にまなこ据え

今谷 脩

鬼やんまは日本最大のトンボの一種で体長10cmをこえるものもある。池や川筋に飛んでいる姿を時々見かける。風水とは単純には吹く風と流れる水を意味するが、住宅や墳墓を建てる時、風水説にこだわる人も多い。風の方向、水流の様子などから幸を呼ぶ方向を見定めつつ飛んでいるようにも見える鬼やんまを「風水にまなこ据え」と詠まれたところが作者の発見。

夏休み孫が出てくる到着口

嘉悦 洋子

孫俳句はうんざりですとおっしゃる方も多し。何故孫だけが敬遠されるの？と心外に思うことがある。男女の愛・父母・祖父母・兄弟の情は連綿と文学の素材になつているのに、孫となると急に風あたりが強くなるのは不公平だ。私は孫俳句大好き。でも情に溺れては駄目と自戒している。この句は「孫が出てくる到着口」とさりとって言うだけなのに孫と過ごす夏休みの万感の想いが伝わってくる。